



第16号  
 編集発行／碧南市  
 哲学たいけん村  
 無我苑  
 所在地／碧南市坂口町3-100  
 〒447-0087：TEL. 0566-41-8522  
 ：FAX. 0566-41-7761

新春特別講演会を平成一四年一月二七日(日)市芸術文化ホール シアターハウスで開催しました。会場で聴講者にお配りしたレジュメは次の通りです。

**演題**

**「宗教と道徳」**

講師  
 哲学たいけん村無我苑  
 名誉村長 梅原 猛氏

**一 道徳が家庭でも学校でも教えられていない**

江戸時代には武士は塾で儒学を教えられ、庶民は寺子屋で仏教を教えられた。こういう宗教的道徳は明治時代になり、学校教育から締め出され、修身教育がそれに代わった。修身教育は「教育勅語」によって理論づけられる。この修身教育も戦後廃止され、今は学校でほとんど道徳について教えられていない。道徳教育の時間が一応設けられているが、しっかりした教科書もなく、道徳はほとんど教えられていないといつてよい。こういう現状のなかから、道徳心をもたない人間が育っていく。

**二 道徳と宗教の関係**

ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』の說  
 フォードル・カラマーゾフに三人の子どもがある。ドミートリイとイワンとアリョーシャである。フォードルは子供たちに、神と魂の不死があるかないかと問う。イワンは、神もなく魂の不死もないと答える。しかし神がなく魂の不死がなかったら文明はなかったとイワンは言う。イワンは、宗教がなかったら道徳はないという思想であり、したがって神の存在や魂の不死を信じられなかったら何をしてもよい、親殺しをしてもかまわないという思想になる。イワンはもちろんこの思想を実行に移す勇氣はなかったが、この思想がイワンの異母兄弟のスメルジャコフによって実行に移される。この父殺しに悩むイワンの苦悩が『カラマーゾフの兄弟』の主題である。

**三 宗教がなかったら文明はなかったら**

ハンチントンにはトインビーにならって、世界に八つの文明があると考え、それぞれ文明の背後にある宗教について言明した。イデオロギーの対立の時代が終わって、文明の対立の時代がきたと言うハンチントンの予言は半ば当たりつつある。日本

の宗教についての把握は不十分。

**四 道徳教育にはやはり多かれ少なかれ宗教教育が必要である。**

日本人は主に仏教によって心性を養ってきた。仏教の六波羅蜜や八聖道の徳が日本人の道徳心情を構成する。特に精進、禪定、正語、忍辱を私は今の日本人にもっとも必要な徳と考える。

**五 精進と禪定**

イチローの場合  
 イチローは宮本武蔵に似ている。ひたすら精進、そして無の自由、それは般若經の精神である。般若經は、とらわれない心の大切さを教える。イチローほど精進の徳と禪定の徳を体現している日本人はいない。

**六 正語と忍辱**

正語の徳は夏目漱石の『坊っちゃん』においてもっともよく表れる。『坊っちゃん』ほど近代日本人に愛された小説はない。坊っちゃんは江戸っ子で、山嵐は会津っ子であり、ともに明治維新によって排除された権力者の子孫である。狸と赤シャツは、明治維新によって権力を得た薩長の田舎武士や京都の公家の影響が強い。そういう近代人の嘘の社会に対して、

江戸や会津の古い日本人のもつ正直の徳を再評価しようとする作品であろう。

忍辱の徳は『忠臣蔵』によって教えられる。『忠臣蔵』の泣かせどころは赤穂義士がさんざん辱めを受けるところであろう。この辱めに堪えて義士たちはみごとに復讐を果たす。復讐そのものにとどのような意味があるかというより、この義士たちの忍辱の精神が広く日本人の共感を誘ったのであろう。私は、この四つの徳を道徳教育の中心にすべきであると思う。

### 七 宗教と平和

仏教は多神論であり、平和を重んじる。釈迦は一二因縁を唱えて、憎悪の連鎖をなくそうとする。しかし一宗教は闘争的性格が強い。一宗教のバイブルは旧約聖書で、そこからキリスト教もイスラム教も出てきた。それは砂漠の宗教であるが、もう一度人類は森の宗教、多神教に戻るべきだと考える。

### 八 道徳教育の

#### 教科書が本気で構想されなければならない

それにはやはり宗教を根幹としなければならぬが、もし一宗教に偏することや許されないならば、新しい日本人の道徳は、仏教を中心として神道、儒教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教などの多くの宗教の道徳を統合すればよいと思う。

## 伊藤証信翁について

### ― 来苑者からの問い

伊藤証信翁について来苑者から最もよく聞かれるご質問と、それに対して、私が本で調べて分かる範囲のことをこれから記してみたいと思います。

#### 伊藤証信翁の西端在住の経緯

翁は大正十四年四月に東京都中野の無我苑から碧海郡明治村西端（現在の碧南市西端）にお移りになりました。翁五十歳の時でした。西端に「竜灯団」というものがあって、それは農村青年から成る当時としてはハイカラな集団であったようですが、翁の宗教や哲学の講義を聴講し、翁と親睦を深めていました。竜灯団は衣食住の一切を提供するという条件で翁夫妻を西端に招聘しました。背景には明治村の京極徳舎（信照寺の住職）、安城の安藤現慶（真宗大谷派本楽寺）、その他同朋の勧めがあり、推察するに翁は田舎に隠棲し読書思索の生活をするこゝとで、無我愛の思想を学問的に体系づけようとお考えだったようです。

#### 翁の西端での活動

西端を拠点とした活動は、同朋の勧めや経済面の援助によってできるようにな



りました。その結果いくらかの収入が得られていたようです。活動の内容はといいますと機関誌「愛と真」の発行、名古屋真宗専門学校へ週二度の非常勤講師、名古屋放送局（現NHK名古屋）で「無我愛の哲学」と題して十回にわたる全国中継での放送でした。全国各地に講師として巡回しておいでだったことから、実際は隠遁生活とは言えない多忙な毎日だったのかもしれない。現無我苑に保存される資料には毎朝、地元の青年たちを集め、カントの「純粹理性批判」の講義をしていたことを示す西洋哲学の愛読書や、西洋哲学・仏教などを講義する風景写真が残っています。西端無我苑に度々ご訪問された森信三氏とは昭和八年に氏の許に通ってカントの哲学及び俱舎、唯識論の共同研究を始めたということですが、森氏は囲碁好きの翁のお相手でもあったようです。

#### 西端の無我苑道場

昭和八年二月、翁は西端に無我苑道場を建設するための準備にかかりました。翁が全国に向けて苑建設を発願すると、予想外の反響があり、夫妻で勧募に関西から四国、九州方面、関東各地を廻り、資金が集まりました。翁夫妻が木造二階建の新居に移ったのは昭和九年十二月十八日のことでした。現在の無我苑は当時無我苑のあった土地に新に建設されたものです。

#### 翁は「哲学者」なのか

書物の中で、翁は仏教思想家と書かれていたり宗教哲学者とされていたりします。私見ですが、これは「無我の愛」という思想が仏教なのか哲学なのかという解釈に絡むので、まっまちななるのだと思います。いかがでしょうか。

（無我苑 大野）

#### 参考図書

「無我愛運動史概観」千葉耕堂、「伊藤証信とその周辺」柏木隆法

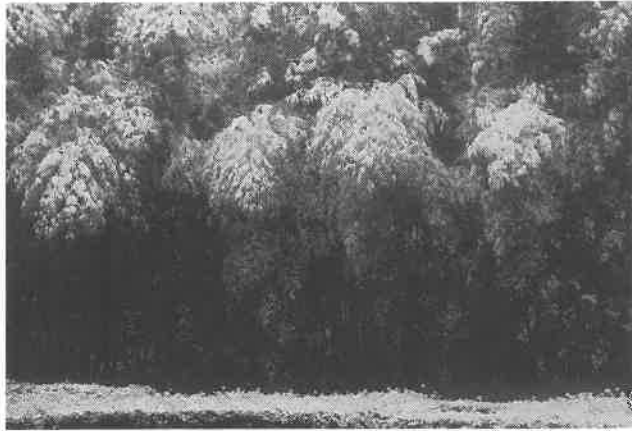
# 本の情報

●朝日新聞社

## 梅原猛の授業「仏教」

梅原 猛著

新春特別講演を聴かれた方には、ぜひ読まれることをお勧めします。子ども心を育てる道徳教育の必要性を哲学者、梅原猛氏がていねいに指摘します。



# 涛々庵茶会

## お茶を一服楽しみませんか

哲学たいけん村無我苑では、毎月第四日曜日(十二月のみ第三)に市民茶会を開催しております。どなたでも、お気軽にご参加ください。

◇呈茶料 一服 四百円

## 平成14年度「涛々庵茶会」席主表

月日	氏名(茶名)	流派	月日	氏名(茶名)	流派
4. 28	小沢わさ子(宗和)	松尾流	10. 27	小笠原 利(宗紅)	裏千家
5. 26	無我苑開村10周年記念茶会		11. 24	杉浦 伸子(宗伸)	裏千家
6. 23	磯貝 勝代(宗代)	裏千家	12. 15	瀬田みな子(宗美)	表千家
7. 28	小笠原美美(宗文)	久田流	1. 26	安形 亮照(宗亮)	裏千家
8. 25	山田 昇(宗昇)	裏千家	2. 23	高山 恵子(宗恵)	表千家
9. 22	杉浦 とめ(宗登)	久田流	3. 23	杉浦 時子(宗時)	宗偏流

## 第二回 伊藤証信翁にまつわる 思い出(座談会)

これは平成十三年三月二十九日(木)に、無我苑研修道場で収録されたものです。

座談会 参加者 岡島 良平 (お)

榊原 純治郎 (さ)

杉浦 元 (す)

(五十音順)

### 《専門学校のこと》

(さ) 私どもは名古屋の専門学校を見学してくださいといわれ、お供で、一日名古屋を廻ったことがあった。

(お) いづごろ?

(す) 西端にいらっしやったのが大正十四年、それから昭和三年から十二年の十年間、真宗の専門学校で講座をつとめられたということで、それを父からも聞いております。

### 《あさ子夫人と中村久子》

(す) 僕が証信さんにごじつ懇にしていたのは、昭和二十一年以降です。その時私は三十歳で、西端の区長をやらされた。それで無我苑との関係ができた。これが私と証信先生との、正式にいう弟子といつては何だけど、仲良くさせていただいたし、弟子の一人にしていた。

私の知っている人は(人の名前が沢山でくる)女の人では、石川じゅうさん。

(さ) そうそう、ここによく来た。

あさ子さんに、中村久子さんの紹介をされたのが、石川じゅうさん。物見小屋で、中村久子さんを見てきて、無我苑で話されたら、あさ子さん、それじゃ私、会う、と言って、中村久子さんに会った。こんな見世物小屋の見世物にされとっちゃ、だめだ、と。あなたはその持っている才能を活かして、社会福祉の障害者活動に力を入れなさい。そのあさ子さんの言葉で、大成功された。

(す) 日本でも有名な中村久子さん。手足のハンディを持った人で、竹のごとく強く生きたということで、有名になった。

(さ) あさ子さんのおかげで、あの人は日本一有名になった。

昭和八年、見世物で巡回しておった中村さんのところへ行くのに、あさ子さんから私と一緒に連れてくれるかというお話があった、学校が休みになったらしいです、と言って、冬休みの十二月にすな、あさ子さんのお供をして、二泊三日で飛騨の高山の中村久子さんのところへ、行っただけです。

寒い夜でしてな、震って二階で寝たんですが。私が土産に持っていた花瓶があるですが、久子さんが気に入って、ついでに水を入れて花を生けて、朝起きたら割れてとったです。それほど、・・・

(お) 凍ってか?

(さ) ええ、凍って、中に氷が張って割れちゃって、ということがありまし

た。あれから中村久子さんも非常に活躍せられて。

(す) ということで、女の人は石川おじゅうさんがね、私のいたらんところをいろいろと指導してくださり、よく間に合った人です。

(さ) しょっちゅうお出入りして、何でもされたですからな。

(す) それからもう一人、女の人で。

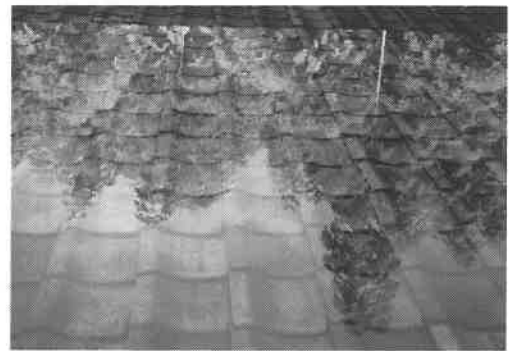
(さ) あっ、石屋の奥さん、何ていう人だったかな。

(す) それが私も名前を忘れて。その二人がいろいろなことをな、ご飯をだしてくださったり、そういう記憶がある。

(さ) その頃は、無我苑に、有名人が来られるとな、あさ子さんから、誰々さんがいらつしやったから夕食をとるなさいませんか、という手紙が来るんです。私が学校の帰りに寄って、夕食をよばれることが度々あったです。書面はあさ子さんが全部、巻紙で毛筆、もう沢山頂きましたけれども、一度も便箋のお便りがありません。達筆で、時々、新川小学校のほかの先生に何と読むのかと教えてもらった。素晴らしい字でしたな。

(司会) 森信三先生は、来られましたか。  
(さ) 無我苑に一番お出入りされたのは森信三先生です。お二人とも大の親友。何日でもゆつくり、毎年必ず、一、二回来られた。碁ができたんです。伊藤先生は好きですから。

(司会) 先生は、囲碁しかご趣味がなかったように伺っておりますが。



(さ) 囲碁だけですな。碁が大好きでした。私も初めて先生にお会いした時にですね、(碁を打つ真似をしてみせながら)「これができますか」って、私は、だめです、と。男の人に初めて会われると、たいてい言われるですな。「できる」と言うと、すぐそこで、しばらくおやりになった。森先生ともよくおやりになって、それが楽しみだったのではありません。仲が良かったですな。

(す) 今で言う神戸大学にもおられて、ここにしょっちゅう見えて。私も講義をきかされた。とても頭のいい人だね。

(さ) ああ、いい方です。余程気が合ったとみえるですな。

(す) 森さんも、また素晴らしい人だった。

(さ) 実に、立派な方です!

(次号につづく)

### お知らせ

哲学たいけん村無我苑  
開村一〇周年記念

梅原 猛 作

スーパー狂言

「ムツゴロウ」

とき 平成一四年十月十日(木)夕刻  
ところ 碧南市文化会館ホール  
出演 茂山千作(人間国宝)ほか

諫早湾を埋め立ててから三〇年の後、干潟はゴルフ場と化していた。会社社長と普通のサラリーマンがゴルフに興じていると奇跡的に生き残っていたムツゴロウ一家、死んでいった蟹や貝たちの怨霊があらわれ、仲間を殺した人間への仇討ち(あだうち)だと彼らをいたぶる…。

### 市民大茶会

とき 平成一四年五月二六日(日)  
ところ 無我苑

哲学たいけん村無我苑開村一〇周年を記念し、碧南文化協会茶道部の協力により薄茶二席、煎茶一席を設けます。呈茶券は当日お求めください。どなたでも気軽に一服していただけます。

### 来村者の声(アンケートより)

◎「哲学」と聞いただけで今まで難しく思っておりましたが、今日、無我苑に来てもう少し知りたい気になりました。忙しく毎日をすごしていた自分を、もう一度見つめなおしてみたい。そしてもう一度足を運んで来たいです。

(市外 主婦)

◎階段の横にかかげられた芸術家たちの寸言が分かりやすく胸に響く。一冊を読むのはたいへんだが、哲学というか、美学というか、真髄に触れる一節に眠っていた感性が目覚まします。

(市外 主婦)

◎こういう場所があるということは嬉しいことですし、感謝申しあげます。じっくり振り返る時間(考える時間)が必要と感じました。

(市外 証券外務員)

◎とても静かでゆつくりゆつくり鑑賞することができて、別世界に入りこんだようでした。目の保養、心を洗われる思いでした。

(市外 パートタイマー)

